

＜岩手三陸被災地視察報告と復興構想案＞

株式会社ディーワーク 新見 宏

2011年の6月17、18日の二日間、東日本大震災の被災地を視察する『被災地フロントライン研修』に参加しました。この研修は自ら大きな被害を受け、未だ路線の半分以上が不通となっている三陸鉄道（株）が自社の鉄道の復旧のみならず、何とか地域の復旧復興の支援にもなることが出来ないかと企画・募集し、被災地域をガイド案内するもので、岩手県三陸海岸の陸前高田、大船渡、釜石、宮古市などをマイクロバスで移動し、視察してきました。地元に着した企業らしく、被災地に配慮しながらも、詳しい被災状況の説明がありました。以下、その視察の感想と発想の域を出ないものではありませんが 復興構想案を報告します。

＜被災地視察感想＞

津波の様子や被災後の悲惨な状況はニュース映像等でおおむね想像できていたが、3ヶ月以上たつてなお街に現地の人々の姿がなく、がれき撤去作業のみが散見されるだけという今のこの様相にこそ悲惨さをより感じる。もう生き返る事ができないかもしれない、という街の死相を見せられているように思えた。何とか復興したいという現地の人々の気力を萎えさせ、くじいてしまいかねない国・行政の怠慢さの方に強い憤りを感じる。

○ 最大級の地震による津波の大きさが被害の甚大さとなっているが、今回の被災地岩手を見るかぎり、三陸の地形の特性によるところも大きいと思われる。急峻で狭まった入り江、狭い平地に市街地の形成。大きな津波が**特異な地勢地形により勢いを増し強い高波となって押し寄せた**ことも被害を大きくしたと思われる。

○ (小さな集落をのぞき) 安易な高台移転にはやはり疑問である。そもそも適地がない。漁業と同じように重要な農業地を浸食する事にならないか？ 住むところは高台。職の場は海辺の「街」？は昔どこかで経験し、多に反省したはずの図式ではないか？ 漁業が重要な産業である三陸沿岸の都市にとって、**高台への移転発想は「ニュータウン」の愚を繰り返すことにならないか？** これまで培ってきた生活や産業活動の再生を二の次にした高台移転は「安全」のみをもとめた安易な方策ではないか？ 「かたわ」の都市では若者も元気がでないし魅力もうまれない。数年後にさらに高齢化がすすみ、新たなゴーストタウンを高台にも平地にもつくりだすことになる。

○ 「人口地盤」や「津波対応建築」のできる事は街づくりにおいては**限界があり**、津波が押し寄せたあとの対処療法でしかない。しかし今回も2時間近くあった地震からの「猶予」の間に人命だけでも救うソフト面整備は重要であろう。

＜提案＞

三陸の地域に昔から住み続けてきた人びとの意志（ふるさととしての思い、伝統や願い）をくじかないこと、なぜ過去に被害があってもこの地を離れずこの地で暮らしてきたか？ 慣れ親しんできた三陸特有の地形／自然環境を生活の再建や経済活動の再生に最大限継承し、活かしていくべきではないか。

以下の課題（テーマ）をふまえて、まち再生の発想による復興計画を提案します。

・従前の地に戻って生活再建できること

～津波に強い安全な街を再生し、従前からの漁業を中心とした産業を復活させ、人々の**生活の再生**をはかる。

・この地に即した復興計画によって、従前の再生にとどまらない、地域の活性化・経済の発展につながること。

～高齢過疎の弱体化した地域社会、厳しい環境（極寒、繰り返される大津波）、交通不便、狭い土地等を克服し、三陸の美しい自然環境を活かす。



人々の姿も無く、復興の兆しの見えないガレキの街

(陸前高田)



(宮古)



狭い高台平場の窮乏な仮設住宅 (田老地区付近)



(大船渡～釜石間)



(吉浜)



鳥越地区

海岸線から間近に立ち上がる急峻な地形



津波の高さを想像させる
屋根の上の車

(大船渡)



津波により打ち上げられ、民家に迫る漁船

(山田町)



地震の後の火災と津波の
三重苦にあった山田町(駅舎)

集落を完璧に守った舊代村の水門

● 「スーパー防波島構想」案

～三陸海岸の特異な地形を活かしながら、入り江奥の都市を守るスーパー防波島を沖合湾口に築造し、その上部の有効活用と相互のネットワーク化により、三陸地域経済の活性化、発展をはかる。

今回の津波で実際に高さ15mの水門によってその内側の集落が完璧に守られた普代村の例があるが、その水門を沖合に持っていけば港も守られるのではないかと、松島湾の群島が津波の緩衝体となり景勝松島を守ったように三陸海岸特有の入り組んだ海岸線をうまく活用し防波島をつくるという発想である。ただし、自然を冒瀆すると大きなしっぺ返しがある。海の生態系を乱さないよう自然破壊とならないよう慎重さを要する。

【一石四鳥の復興計画】

1. 大津波から、このわずかな平地の市街地を守るため、三陸海岸の特異な地形（入り組んだ海岸線）を巧みに活かしながら、主要な都市の入り江口に島型防波堤（スーパー防波島）を築造する。埋め立てには被災地3県で5000万トン以上とも言われて処理に困っているガレキ・ヘドロを活用する。
2. スーパー防波島上部は都市間自動車交通路中継地や通勤・飛行場、大型船埠頭、自然エネルギー基地、テーマパークや工場団地などに有効活用し、相互のネットワーク化によって地域経済の活性化をはかる。
3. この海域での土木事業は国家事業とし、そこでの経済活動・運営は国内外の投資により民間企業によっておこなわれ、雇用の促進と三陸の新たな産業／観光の発展に寄与する。
4. その上で、震災前と同様の地に漁業と観光を中心とした活気ある今まで通りの職住近接の再生街づくりを進める。事業を再建したい意欲ある人々にはすぐにでも被災地に戻ってもらうことができ、自由な街の復興が可能となる。またスーパー防波島ネットワークにより三陸地域全体の産業経済も刺激を受け、活性化を促される。被災地域は、都市再生機構（UR）も含めた民間企業の力を活用する。民間の経済活動にそった活力の導入をはかる。地域の中心部はURが土地を収用し、街づくりのためのマスタープランを作成し、具体的な計画、建設、運営は民間企業（の投資）にゆだねる。

◎ 都市は「1日にしてならず」。国や行政が街を造るのではなく、そこに暮らす人々が少しずつ街を創っていくものと思う。まずは人々が一刻も早く元のまちに帰って生活できることを優先したい。人々が愛着をもって暮らし、いきいきと働くことができるための仕掛けや基盤づくりが何かを考え、実行することが「公」の役割であると考えます。
(20110629)

【津波防御+地域復興+産業・生活の活性化・発展に寄与するスーパー防波島構想。】

・北海道（と首都圏の中継地点として）

・内陸主要都市と結ぶ



・都市間交通を容易にする
自動車交通路IC機能。

沿岸主要都市を結ぶ

- 三陸特有の特異な海岸線/地形を活用し、津波防御の防波島を湾口に築造する。
- 平地の少ない地域での有効な土地を確保する。
(ガレキも埋め立てに活用)
- 従前の市街地は津波から守られた安全な地域となり、自由な復興・再生活動が可能。
- 防波島上部はコミューン（地域間小型機航空路）や貨客船、高速地域間自動車路の中継地（ハブ）など地域経済活性化に活用する。
- 各地役割分担のされたスーパー防波島のネットワーク化により三陸地域全体の経済・暮らしの活性化を図る。

©2011 Google - 画像 ©2011 TerraMetrics, 地図データ ©2011 ZENRIN

地域間のネットワーク

・首都圏との交通（小型旅客機や大型船）の中継地